

## ②B—34 色彩に関する実態調査（その1）

—高校生を対象として—

熊本大 ○和田 ユキ  
河村 邦子

1. 衣生活は勿論、すべての分野において、色彩の占める役割は大きく、生活と色彩の関係は密接である。

各年齢層の嗜好色、嫌悪色、並びに色の感情、連想などの調査により、一般に好まれる色は何か、また心理的、生理的なものといかなる関連性があるかを知るために、本調査を行なった。

2. 色彩の弁別能力が最高に達する高校生を対象として、熊本県の高校生男女600名について、1961年9月及び1962年9月に調査を行なった。

試料は日本色彩社発行の標準色を用い、好嫌2色を選ばせ、Hue Value Chromaの上から検討した。

3. 嗜好、嫌悪色全般についてつぎのような結果を得た。

(1) ある色は、男女共通に嗜好、嫌悪同じ傾向を示し、またある色は、性別により嗜好、嫌悪が異なり、一般に男性は力強さを、女性は美しさ、やさしさを求めている。

(2) ある色は、嗜好、嫌悪率が非常に高く、ある色は非常に低い。

(3) 嗜好、嫌悪率の高い低い色相によるが、明度彩度にも関係がある。

(4) 二つの色の配色関係、すなわちその色をどんな環境においてみるかにより、好き嫌いが生ずる。

また、特定な色について、嗜好色と性格との関係が、認められた。